

村 田 一 男 さ ん (大正2年生)



開拓に入って第一にやる仕事は、家を作ることです。場所を決める条件として水の便利なこと、日当たり良いところを見て決めるのです。太陽は大切ですからね。近くの森の中から掘り立て用の柱を切り出し、骨組を作り壁は笹を束にして一束一束並べては結んでゆくのです。屋根は、ムキまさを使用し葺きました。入口の戸は、肥料用のかますを開いて下げ、内部は、土間にいろいろを作り焚き火の出来るようにして、床は板が高価であり、充分にありませんから、木の小枝を下に適当に並べ、上に笹を敷いてその上に〔ゴザ〕かむしろを敷いて畳の代用とするわけです。窓は明りを取る程度で、窓らしいものではありません。表に家を作るときと同じ要領でトイレを作って、一応住居作りは終わることになります。馬屋とか物置のようなものは、暇をみては逐次作業を進めてゆくわけです。住む家を作っても隣家は遠いし、他に聞こえる音は、鳥の鳴き声、キツネの声、時には野兔が姿を見せる程度で、夜は静かといえこれ位静かなことはないでしょうな。星のまたたきすら音がするのではないかと感じるのですから。そんな秋口のある夜、表を人の歩くような、ガサッ、ガサッと足音がするのです。夜分に私の家を訪ねて来る人は誰だろうと思っておりますと、ハタッと足音が止まったとおもったら、むしろの戸が揺れたなと感じた瞬間熊の奴がニユーッと顔を出した時は、驚いたのなんのっておもわず大声がでただけでなんにも出来なかった。今でも時折思い出すね。

岩松へ開拓へ入ったのですが、当時は、日用品とか食糧は、鹿追か新得に出て買い求めたのだが鹿追へ通ずる道路はないのですよね、そのため獣道、俗にいう、踏み分け路を行くのですが、あの高い所をよじ登るようにして瓜幕へ出たものだ。又新得方面へは一晩泊って帰って来るのさ、もちろん日用品は背負って歩いてね。だから塩などは貴重品扱いであったね。その生活の基盤となっている土地は砂っ気の多い所で、檜、榎、などの大木が多く生えていたな、これを切り倒すのに苦労したね。一本で2〜3日位かかるんだ。切り倒したら適當の長さに玉切りして集め山のように積み上げ秋か春早く焼いたんですよ。二日も三日も燃えていたなあ。次には、木の株と株の間を1鍬1鍬起こしてゆくのだが、笹の根、木の根があるのでおもうように鍬がささらないし、株と株の間が狭いので馬が使えないから苦しく、つらい仕事でしたがやり通したものね。若かったんだなあ。それで、食糧にもなり、荒地にも強い「イナキビ」を蒔いたのだが土地が若いためか、収穫はあったね。

開拓という仕事は、頑強な体力と家族の協力、次には希望を捨てないことと思うね。

